

シルク岡谷の近代化産業遺産群

1 つるみねこうえん 鶴峯公園

初代片倉兼太郎は製糸工場で働く低年齢の従業員への教育が必要と感じ、大正6年ここに私立片倉尋常小学校を開校した。昭和4年には二代兼太郎が初代兼太郎の銅像を建設し公園化され、昭和10年に旧川岸村に寄贈された。ツツジが植えられさらに整備され、現在では、中部日本有数のツツジの名所として知られている。



2 きゅうかたくらぐみじむしょ 旧片倉組事務所

明治43年に建築された大製糸会社片倉組の事務所。本社が東京に移転をした後も本部事務を引き継ぎ初代、二代片倉兼太郎の活躍の拠点となる。木造二階建て、瓦葺き（現在は銅版葺きに改修）で一階内部の洋風玄関、事務室はそのままでの姿を残し、二階には和風の大広間を持つ。明治時代に造られたレンガ造りの数少ない製糸工場事務所として貴重であり、現在は片倉工業株式会社の印刷部を継承した中央印刷株式会社の事務所として使用されている。国登録有形文化財。



3 きゅうはやしけじゅうたく 旧林家住宅

明治9年に天竜製糸所として創業した一山カ林製糸所の初代林国蔵の住宅。明治40年秋にほぼ完成した。林国蔵は開明社の経営にも参画し、生糸の品質管理システムを構築、日本の製糸業発展の基を築いた。住宅は主屋と離れの座敷、茶室、洋館に別れ、主屋の南側には繭倉庫の形式をとどめる土蔵が並ぶ。西洋装飾の芸術、「幻の金唐紙」と呼ばれる壁紙が張り巡らされている和室や欄間彫刻の希少価値は高い。国指定重要文化財。



4 なりたこうえん 成田公園

大正6年、昭和天皇の立太子の記念に造られる。製糸工場の従業員の慰安の地としても多くの工女さんに利用された。製糸業発展に大きく貢献した第十九銀行頭取黒沢鷹次郎の銅像がある。かつての製糸全盛の工場地帯に思いを馳せることができる。



5 まるやま 丸山タンク

大正3年に市内間下南側の塚間川の西方一帯の製糸工場への給水のために建設された。天竜川にポンプを設置し、導管により水を揚げた。現在は、丘の上に外形12m、7.3m、3.1mの三重円筒型（壁の厚さ約61cm）の巨大なレンガ積が残されている。



6 きゅうやまいちはやしぐみせいしじむしよ しゅえいじよ 旧山一林組製糸事務所・守衛所

明治12年に創業した山一林組の事務所。建築は大正10年。山一林組は昭和5年に当地方第4位の製糸会社に発展する。二階建て瓦葺きで、壁は煉瓦タイル貼り。一階は事務所と応接室、二階は座敷と広い講堂があり、窓を規則的に設けているので室内は明るく開放的。製糸業全盛期をしのぶ数少ない建物である。国登録有形文化財。



7 かぶしがいしやきんじょうまゆそうこ 株式会社金上繭倉庫

岡谷に残る数少ない繭倉庫。繭を自然乾燥させるために窓を多く付けた構造などから、建築年代は明治期と推定される。旧サスダイ仲村甫助製糸所の繭倉庫。木造三階建、鉄板葺。入口の土戸が大きく、土蔵の延長としての特徴がある。現在は、株式会社金上が譲り受け保守にあたり、倉庫として大切に使用されている。



8 さんれいくようとう 蚕霊供養塔

岡谷の製糸業関係者が、蚕糸業の発展を祈念するために昭和9年に照光寺に建立した供養塔。木造銅葺層、基壇積石14尺四方、高さ5尺の美濃石を使った堂塔建築様式。世界的不況の時代に、製糸業関係者18人が発起人となり約3万人から寄付を集め、犠牲になった蚕の霊を慰めた。このことから岡谷の人々の「お蚕様」への思いを感じ取ることができる。



9 きゅうおかやじょうすいどうしゅうすいこう 旧岡谷上水道集水溝

岡谷の製糸業が最盛期を迎え、飲料水や工業用水の需要が増え、また衛生面からも上下水道建設の要望が高まった。そこで昭和2年塩嶺山麓の滝ノ沢に集水溝、導入管、受水槽、分水槽が造られ、翌3年に給水が開始され、昭和63年まで利用されていた。ものづくりのまち岡谷の人々の生活を支えた集水溝跡として保存されている。国登録有形文化財。



10 しりつおかやさんしほくぶつかんしよざうしりょう 市立岡谷蚕糸博物館所蔵資料

昭和39年に開館し、日本製糸業の近代化を担った歴史と精神を伝える製糸経営資料、写真資料や岡谷市鳥瞰図など30,000点を超える資料を収蔵している。国内に唯一現存するフランス式繰糸機や明治初期の諏訪式繰糸機などが展示されている。



11 きゅうおかやしやくしよちょうしゃ 旧岡谷市役所庁舎

製糸家の尾澤福太郎が岡谷市制施行を記念して寄贈した庁舎。昭和62年まで市役所として使用され、現在は岡谷市消防庁舎として使用されている。昭和11年の建築で、鉄筋コンクリート造りタイル貼り二階建て、一階は、カウンターがめぐる庁舎の姿をほぼ残す。国登録有形文化財。



1 2 ^{きゅうさんししけんじょうしよぞうきかいとう} 旧蚕糸試験場所蔵機械等

現在の独立行政法人農業生物資源研究所は昭和 22 年、農林省により蚕糸試験場岡谷製糸試験所として岡谷に設けられ、日本における製糸技術研究の重要な拠点となった。自動繰糸機を中心に、繭乾燥から製糸まで一連の蚕糸の生産機械が残され、多条繰糸機等が認定を受けている。



1 3 ^{しんますざわこうぎょうかぶしがいしやしよぞうきかい} 新增澤工業株式会社所蔵機械 ^{よこ} (横 ^{ばん} フライス盤)

明治 29 年に創業した日本に残る数少ない製糸機械メーカーである。増澤商店として創業した当時は地元製糸工場で使用する座繰り用の小道具などの製造を行っていた。製糸業全盛期は多条繰糸機など 80 種類を越える製糸機械器具の製造販売を行った。特に昭和 5 年から販売を開始した「増澤式多条繰糸機」は日本一のシェアを誇った。こうした製糸機械を生み出した切削用機械「横フライス盤」が認定を受けている。



1 4 ^{きゅうやまじょうみやさかせいしじよむしよ} 旧山上宮坂製糸所事務所 ^{こうじょうとう} ・工場棟 ^{さいそうこうじょうとう} ・再繰工場棟 ^{きよたく} ・居室

創業は明治 7 年、ざぐり製糸にはじまり、大正～昭和の全盛期と戦後の復活期に中規模の製糸工場として発展した。「櫛御殿」とよばれ、諏訪中から見に来る人がいたという居室は明治 26～27 年頃の建築で当時の隆盛がしのばれる。同敷地内には昭和 2 年に建築された事務所を始め、一連の工場体系が残され製糸工場の労働風景を想像することができる。



1 5 ^{まるなかみやさかせいしじよまゆそうこ} 丸中宮坂製糸所繭倉庫

昭和 3 年に創業し、明治から昭和にかけて使われていた諏訪式繰糸機を現在も稼働させている全国で唯一の製糸工場。諏訪式繰糸機の他にも江戸末期から明治初期に使われていた「上州座繰器」で玉糸生産も行っている。宮坂製糸所では製糸業全盛期を思わせる糸取りの場面を目にすることができる。

